

神戸で労働運動や生活協同組合運動などを展開した飯川豊彦（一八八八—一九六〇年）の歩みを文学的な面からたどる企画展が、神戸市灘区の神戸文学館で開かれている。社会運動家のイメージが強いが、残された著作は三百五十編に上る。来年は、貧困に苦しむ人々と飯川がかかわり始めてから百年。多彩な資料がそろい、さらに立体的にその業績をとりえる機会となりそうだ。

（新聞真理）

文学に見る 飯川豊彦

今回は、ベストセラー小説「死線を越えて」（一九二〇年）の手書き原稿や直筆の掛け軸を、所蔵

神戸文学館 企画展

する明治学院（東京）以外で初めて公開。自伝的小説である「死線……」は三部作で計約五百万部も売れ、その後、取り組ん

「死線を越えて」手稿など

多くの社会事業を経営的に支えた。

家族や隣人に温かいまなざしを向けた詩集「涙の二分」に与謝野晶子が寄せた序文も紹介。無名の若者に、晶子は「飯川さんの生一本な命は最も旺盛にこの詩集に溢れて居ます」と賞辞を送り、深く共鳴していた様子がうかがえる。

新聞連載小説「空中征服」に添えられた直筆の挿絵は達者で、驚かされる。飯川が考案した子ども向け教材などもあり、多方面に関心を示した生涯をつぶさに伝える。

企画展「愛の労苦と希望―飯川豊彦の文学―」は来年二月二十四日まで。無料。十二月二十八日―一月四日と毎週水曜休み。☎078・8882・2028



「死線を越えて」の手稿。後ろは執筆に使った万年筆＝いずれも神戸文学館